

平成 29 年 8 月 3 日現在

機関番号：32506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780080

研究課題名(和文) Power, government and the discrimination of Roma in Romania: an alternative explanation

研究課題名(英文) Power, government and the discrimination of Roma in Romania: an alternative explanation

研究代表者

ヨネスク マグダレーナ (Ionescu, Magdalena)

麗澤大学・外国語学部・助教

研究者番号：40725298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円

研究成果の概要(和文)：この研究では、ロマ民族に対する構造的な差別(言説、政策、官僚的対応)という観点から、現代ルーマニアの歴史的な政治体制を比較し、共通点及び相違点を特定し、分析した。共通点に注目した場合、全ての政治体制(立憲君主制、独裁体制、民主主義体制)を支える権力ダイナミクス(トップダウン政治、統治・可視化、簡略化)に、進歩的な言説及び科学的なツールが合わさり、ロマに対する差別的な構造がつくられたと論じる。政治体制が変わる度に、進歩主義が謳われるものの、ロマに対する差別は異なる文脈において再利用され、深く根付くことになった。従って、今日に至るまで、依然としてロマに対する差別は「当然視」されている。

研究成果の概要(英文)：In this research I have analysed the discourse, policy and practice underpinning the structural discrimination against Roma throughout the different political (monarchist, fascist, communist and neoliberal) regimes in Romania. Focusing on the common aspects, I have argued that the modern progressive discourse, the power dynamics (top-down politics, governmental visibility and control), the scientific tools of inscription (simplification) and management have all combined to create and sustain institutionalised discriminatory practices against the Roma. Defying every regime transformation, the progressive modernist discourse has also allowed for a realignment of political and economic interests that have recycled and reinforced old practices, deepening and naturalising the discrimination faced by the Roma.

研究分野：社会科学

キーワード：Gypsy/Roma Romania discrimination power government state

1. 研究開始当初の背景

東欧諸国において、1989年の革命は、共産主義の敗北及び経済的自由主義の勝利の意味だけではなく、民族主義的な政治の復活という意味ももった。計画経済から自由経済（資本主義）への移行の過程で生じた社会・経済的な苦しみは、政治的に利用され、少数民族にもその責任を負わせた。

特に脆弱な立場のひとつにあったロマ民族は、散発的なヘイトクライム（民族憎悪や暴力行為）のターゲットだけではなく、極めて警戒すべき、構造的な差別に基づく政策づくり及び実行の標的にもなっている。

1989年以降、この四半世紀を通して、ロマに対してのルーマニア政府の義務不履行は、市民社会及び国際機関によって厳しく批判され、差別的撤廃や社会・経済的な状況の改善が求められている。(FRA)

2. 研究の目的

この研究の目的は、ルーマニアにおいてのロマ民族に対する構造的な差別の現状及びその論理を説明することである。主な研究の問いは、「民主主義（体制）に移行を成し遂げたルーマニアでは、なぜロマに対する構造的な差別は未だに根強く残っているのか」である。

その答えを探るために、近代ルーマニアが経験した様々な政治体制における構造的な差別の成り立ち及びダイナミクスを分析した。これらを比較することで、政治的変貌を遂げてなお続く、構造的差別のコアな要素を特定した。同時に、これまで差別の分析における民族・文化的側面から、社会・政治的側面への焦点のシフトを試みる。

3. 研究の方法

この研究では、ロマを『社会的な脅威である「シプシー」』として構築する政治的言説やアクター、その「脅威」をコントロールするために利用される政治的及び官僚的ツールを分析した。理論的な枠組みとして、M.フーコーによる「権力」及び「統治」のアプローチを利用した。(Foucault)

さらに、ロマの視点から国家プロジェクトに対する抵抗及びそのプロジェクトの失敗を分析するため、J. スコットの近代国家による統治へのアプローチを利用した。このようなアプローチを通して、国家機関がロマ民族に対してどの様に権力を行使し、「統治」しようとしてきたか、なぜ行き詰ったのか、そしてそれらをどの様に正当化させたのか、を明らかにした。(Scott)

また、この研究で一次資料及び二次資料を利用した（政府機関及び市民社会による公式資料、アーカイブ資料、インタビュー及び歴史証言記録）。

4. 研究の結果

ロマについてこれまでに書かれた歴史・政治記録は、ほとんど非ロマの権力者によるものである。従って、これらの記録は、ロマの主観を無視してきただけではなく、非ロマ権力者の一方的な考え方、利害関係のみを反映した「現実」を構築してきた。

ルーマニアの歴史的な政治体制にまたがって、これらの記録を分析することで、権力者がなにをもって、ロマを統治・コントロールをしてきたかが見えてくる。各政治体制の相違点（言説、政治的及び官僚的ツール、実行手段）は別として、構造的差別を解決に導くためには、共通点の理解は欠かせない。

近代以前のルーマニア（ワラキア、モルダヴィア、トランシルバニア公国）における社会構造は、権力者による自給自足農業者の財的搾取に基づいていた。(Stahl) 土地へのアクセスが閉ざされたロマ民族は、歴史記録に初登場する段階から「奴隷」として、社会階級の最下層に置かれた。そして、奴隷は私有財産として所有されていたために、ロマは他の人々（自由農民・農奴のコミュニティー）と違い、慣習法による権利、自由及び保護へのアクセスもなかった。

16世紀後半には、成文法として登場する奴隷法では、所有者の権利の保障が中心で、奴隷自身を保護するものではなかった。黎明期は単なる財政的な論理で生まれた「奴隷制度」だったが、数世紀を経て民族的な意味をもつようになり、ロマ民族に深刻な社会的烙印を残すようになった。

しかし、時代と共に、資本主義の原理が導入され、土地や労働のもつ意味、そしてこれらに基づく社会的関係は大きく変化した。同時に、搾取階級の一部も社会・経済的变化を求めようになり、やがて農奴制度及び奴隷制度は維持不可能になっていった。(Stahl) 奴隷制度が問題視され、解放運動が生まれる文脈は、近代化に出遅れたルーマニアの国家統一・建設プロセスと重なった。しかし、西ヨーロッパの啓蒙運動は東欧に及ぶ際には、真の「自由化の勢力」として入ってきたのではなく、「中央集権化の勢力」としてやってきた。(Gellner) このような中、ロマ民族は奴隷解放によって、政治的な自由を手に入れるものの、新しい資本主義経済や国民国家の世界へ、何のサポートもなく投げ出された。従って、奴隷解放され、ルーマニア国民となったばかりのロマは、次々と真新しく複雑な権利証書、国有地管理局、税金、料金、評価・査定、申請などの記録の世界と直面した。元々当局と直接の関わりがなかったロマの前には、大きな壁が立ちはだかった。同時に、奴隷制度では「保証」されていた衣食住も無くなったことによって、経済的にも大きな困難を背負った。

近代の社会システム（個人所有権、生産及び管理）を伴って、新たな権力機構として国家（政府）がつくられた。その新たな役割とは、国益をもたらすべく、人々に新しいアイデンティティーを与え、行動、責務を規定し、管理することだった。この際に、上から統治するために、国民の生活をより詳細にわたって可視化する必要性も生じた。

為政者からは無秩序に見える現実も、ローカルレベルでは深い意味を持ち、実のところ、現地特有の条件で最も有効に機能していた。しかし、国家統一及び全国民を統治するためには、国家レベルで理解可能な形で、その現実を単純化そして記録させる必要があった。しかし、その過程で、現地の条件や特徴は切り捨てられ、ローカルコミュニティ及びその人々にとって非人間的な「現実」が作り上げられる。

当然だが、単純化されたこの現実に基づく政策は、失敗に終わることが多いだけではなく、実行の過程で現地の有効なしきたり・慣

習を途切れさせることも多い。また、為政者がその失敗を弁明及び正当化する際には、古くから続く「ジプシー」としてのステレオタイプや偏見を利用しつつ更新してきた。

資本主義システムは、経済生産のパターンを根本的に変容させる過程で、大量の貧困や様々な社会的不安を生じさせる。大きな転換点となる経済危機の時には、「魔法の解決策」を約束するポピュリスト（人民・大衆主義）政治が台頭してくる。そのような中に、国民の怒りや不満は「よそ者」や「犯罪者」に対して向けられる。

一方で、反自由主義（ファシスト、コミュニスト）体制下では、ロマが貧困から自力で脱出するためのその場しのぎの行いか問題視され、非合法化されてきた。そして、政府の治安維持のためのあらゆる措置（人種の隔離政策から民族の否定的同化政策まで）の対象となった。

もう一方の新自由主義政権下では、主流社会から排除されたロマ民族の貧困や彼らへの差別は、国家福祉政策の行き過ぎによって生じた結果だと強く批判されている。財政困難で維持不可能になった福祉制度が縮小する中で、経済的困難者がサポートの対象となる条件が見直されている。そして、為政者がここで再びロマの自由や権利を認めたものの、実際には、新しい経済・社会的現状に対応できないものには、その責任を負わせる政策をとっている。そのため、国による援助の対象外になるロマには、厳しい現実となっている。

ルーマニア政府は欧州連合（EU）から単に批判や圧力だけでなく、ロマに対する政策づくり・実行のため、専門的及び経済的な手厚いサポートも受けている。しかし、同時に、馴染みのない複雑な超国家的手続きや基準が、すでに煩雑となっており、国内官僚の仕事をより複雑化している。そのことが結果的に、政府にとって、ロマに対する責任回避の口実ともなっている。

為政者は、一向に成果が上がらない政策を、引き続きロマ自身の責任にしている。こうした状況が成立する背景には、ロマの差別的歴史に対する政府の責任についてのルーマニア国民の無知が原因であると論じた。本当の意味で、彼らの過去と向き合わず、ルーマニア

政府の責任を知らずして、ロマに対する差別の構造を理解することは不可能である。従って、この問題に対する本研究の貢献は、ルーマニア政府がなぜ、どのようにして、ロマの「可視化」及び「統治化」を試みたかを分析し、長く続く構造的な差別のダイナミクスを明らかにしたことだと言える。

<引用文献>

- 1) Foucault Michel, James Faubion, *Power: The Essential Works of Michel Foucault 1954-1984*, NY: Penguin, 2002.
- 2) Fundamental Rights Agency (FRA) *EU-MIDIS II: Second European Union Minorities and Discrimination Survey, Roma- selected findings*, Luxembourg: Publications Office of the European Union, 2016.
- 3) Gellner Ernest, "The Struggle to Catch Up", *Times Literary Supplement*, December 9, 1994, pp. 14-15.
- 4) Scott James, *Seeing like a state: how certain schemes to improve human condition have failed*, Durnham: Yale University Press, 1998.
- 5) Stahl Henri, *Traditional Romanian Village Communities*, Cambridge: Cambridge University Press, 1980.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

- 1) Ionescu Magdalena, "Power, Government and the Discrimination of Roma in Romania: an alternative explanation", IX World Congress of ICEESS (国際学会) 2015年8月5日、幕張千葉。
- 2) Ionescu Magdalena, "Power, Government and the Discrimination of Roma in Romania: an alternative explanation", Romanian National Institute of History 'Nicolae Iorga' (招

待講演) 2015年9月2日、ブカレスト、ルーマニア。

- 3) Ionescu Magdalena, "Integrating the Romanian Roma", Interdisciplinary Workshop on Migration and Ethnic Integration (国際ワークショップ) 2016年8月8日、上智大学、東京。
- 4) Ionescu Magdalena, "Integrating the Romanian Roma: Between European Policy and Romanian Practice", Gypsy Lore Society Annual Conference (国際学会) 2016年9月15日、Sodertorn University, ストックホルム、スウェーデン。

6. 研究組織

1. 研究代表者

ヨネスク マグダレーナ (Ionescu Magdalena)
麗澤大学・外国語学部・助教
研究者番号：40724298